

第六節 観光振興を通じた魅力ある地域づくり

一 国内観光の進展

拡大と変容 の国内観光

一九八〇年代以降の国内観光は、国民の観光への意識の高まりや全国に広がる「地方博ブーム」などにより拡大を続けたが、一方で、観光目的の多様化や旅行形態の変化などの変容が見られた。

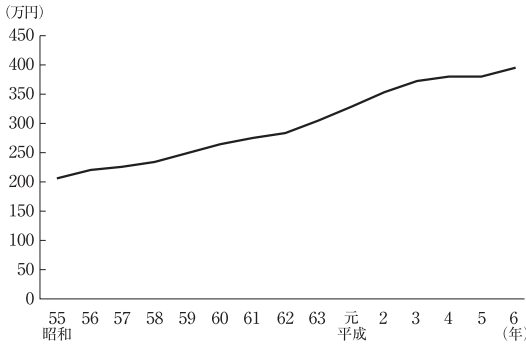


図 84 1人当たりの国民所得の推移
〔「長期経済統計」より作成〕

安定成長期にあった日本経済は、昭和六十(一九八五)年のプラザ合意後の円高不況やバブル経済崩壊後の急激な景気後退を経験した。この間の一人当たりの国民所得は、昭和五十五年の二〇八万円が、円高不況期やバブル経済崩壊後を除き、5%以上の伸びを続け、平成六(一九九四)年には四〇一万円と倍増した。また、昭和六十三年の労働基準法改正(一週間の所定労働時間が四〇時間に)などにより、平成元年度以降、年間労働時間の減少傾向が顕著になった。週休二日制適用労働者割合は平成六年に九五・四%となり、ほとんどの労働者が週休二日制となるなど、自由時間は増加した。

また、昭和五十六年の「神戸ポートアイランド博覧会(ポートピア'81)」

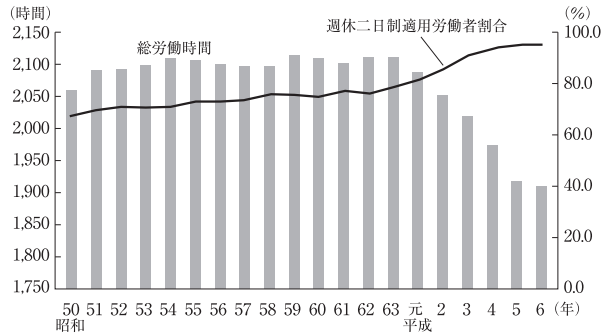


図 85 常用労働者月間実労働時間と週休二日制適用労働者の割合
 (「毎月労働統計調査」より作成)

五年の宿泊観光旅行の主な目的の上位三項目(①「慰安旅行」②「自然・名所・スポーツなどの見物や行楽」③「スポーツ・レクリエーション」)で七二・六%を占めていたが、平成六年には六四・〇%に減少した。このように日帰り観光、宿泊観光ともに、観光目的などの分散化が進み、多様化が進捗したといえよう。

なお、この時期、観光産業等においても情報化が格段に進展した。例えば、日本交通公社(現JTB)は、昭和四十九年に日本航空(JAL)や全日本空輸(ANA)などの航空会社とのオンライン化を実施し、五十

(総来場者数一六一〇万人)が大成を収め、全国に「地方博」ブームが起こるほか、東北・上越新幹線開業(五十七年)、関越自動車道開業(六十年)、瀬戸大橋開通(六十三年)など、交通インフラ整備が進み、国内観光の拡大に大きく寄与した。

こうして、「レジャー・余暇生活」に力点をおく国民は昭和五十五年の一九・九%が、五十八年には二六・三%となり、「住生活」(二五・二%)を上回り一位となった。その後も増加し続け、平成元年度以降は三〇%代後半で推移し、全国的に、日帰り観光、宿泊観光ともに増加した。

昭和五十五年の日帰り観光の主な行動の上位三項目(①「風景鑑賞、花見、神仏参詣等の行楽」②「ドライブ」③「海水浴」)で全体の五〇%を占めていたが、平成六年には三二・九%に減少した。また、昭和五十

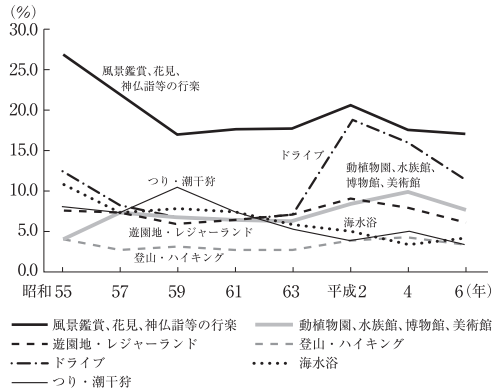


図86 日帰り観光の主な行動の推移
 (『観光の実態と志向』より作成)

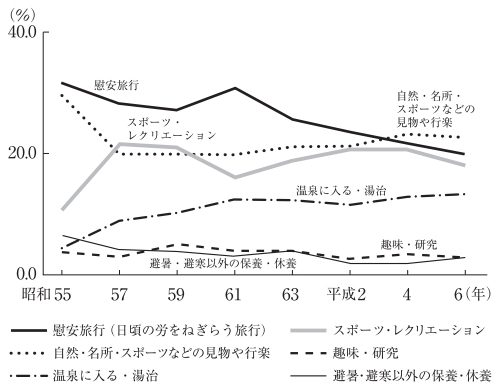


図87 宿泊観光の主な目的の推移
 (『観光の実態と志向』より作成)

ど、日本航空系以外のものも取り扱う旅行総合システムを開発した。このように、国内観光旅行、後述の海外観光旅行とともに、パッケージ・ツアー(旅行会社の主催旅行)が急増した。国は、昭和五十七年に旅行業法を改正し、主催旅行を法定するほか、新たに標準旅行業約款を定めるなど取引の安全性の確保を図った。

イベントで盛り
 上がる県内観光

県内観光客総入込数をみると、昭和五十五年度の六八九九万人が、五十六年度のポートピ
 ア⁸¹(総来場者数一六一〇万人、以下同様)の開催、六十年年度の三大イベント(ユニバーシア
 ア⁸²(総来場者数二二八万人)、グリーンエキスポ⁸⁵(二二一万人)の開催、六十三年度の北摂・

ド神戸(五五万人)、くにうみの祭典(二二八万人)、や全国高等学校総合体育大会の開催、平成元年度の⁸⁹姫路シロトピ
 丹波の祭典(ホロンピア⁸⁸)(二四七万人)や

五年には日本国有鉄道(現
 JR。以下、国鉄)の予約シ
 ステムをオンライン化した。
 国鉄は、平成元年に、鉄道
 乗車券発券システムに旅行
 業システム(旅館・ホテル
 の宿泊券の予約・発券)を付
 加した。JALも、一九八
 〇年代の半ばから、パッ
 ケージ・ツアーやホテルな

第四章 社会の変容とこころ豊かな県民生活の創造

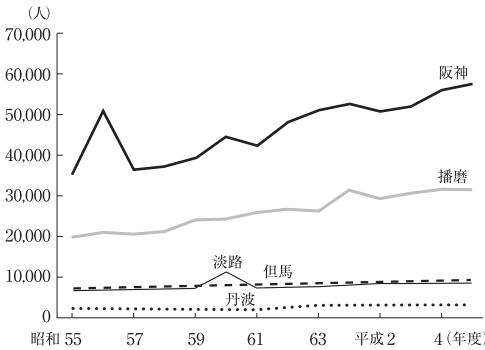


図 88 地域別の観光客入込数の推移
 (「観光客動態調査」より作成)

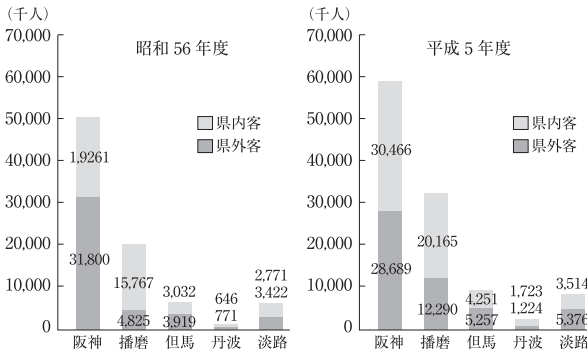


図 89 県外客・県内客別観光客入込数の推移
 (「観光客動態調査」より作成)

ア博(二五八万人)の開催、五年度のアーバンリゾートフェア神戸⁹³(一六三万人)などによる大幅な増加もあり、平成元年度には一億四二二万人と一億人を超え、五年度には一億二九六万人と順調に伸びている。これを地域別にみると、特に、昭和五十六年度の阪神(ポートピア⁸¹)、六十年の淡路(くとうみの祭典)、六十三年度の阪神、丹波(ホロンピア⁸⁸)、平成元年度の播磨(ポートピア⁸⁹姫路シロトピア)、五年度の阪神(アーバンリゾートフェア神戸⁹³)など、イベントの開催がその地域の観光客入込数の増加につながっている。また、昭和六十三年度は、ホロンピア⁸⁸の開催による阪神、丹波や大鳴門橋の開通により新たな観光客の流入をみた淡路を除いては、昭和天皇の死去に伴う社会全体の自粛化の影響を要因として、観光客入込数が減少した。観光は、社会、経済情勢の大きな変化の影響を受けるものであることを示している。

観光客総入込数を県内客、県外客別にみると、ポートピア⁸¹が開催された昭和五十六年度と五十七

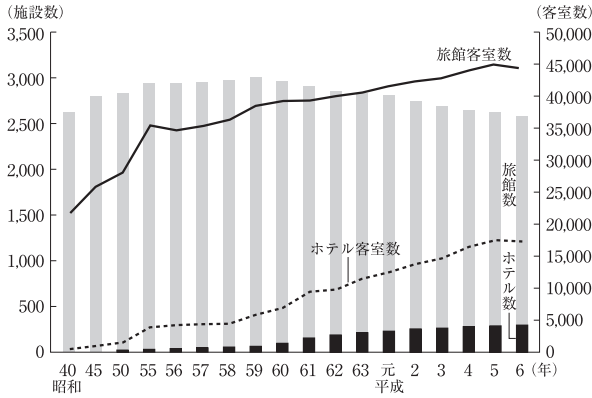


図90 旅館・ホテルの施設数・客室数の推移
〔衛生行政報告例〕より作成

年度は、県外客が県内客を上回ったが、総じて見れば、県内客が半数以上を占めている。また、日帰り客と宿泊客別にみると、日帰り客は、昭和五十五年度の六八九九万人が、平成五年度には一億二九六万人と一・七倍となった。宿泊客も、昭和五十五年度の一二七四万人が、平成五年度には一八九五万人と、一・五倍となったが、日帰り客の伸びを下回っている。バブル経済崩壊後の景気後退局面での、「安」「近」「楽」レジャー（近場で費用のあまりかからない楽しみ本位の余暇活動）志向へのシフトとみることもできよう。

県内観光インフラの充
実と旅行形態の変化
道路や鉄道、空港などの交通インフラの開
通状況をみると、道路では昭和五十五年

明姫幹線（全線）、五十八年に中国縦貫自動車道（全線）、六十年に大鳴門橋、阪神高速道路湾岸線（関西国際空港まで）が開通した。鉄道では、昭和六十二年に国鉄の分割民営化があり、六十三年に北神急行電鉄北神線、平成六年にJR智頭線が開業した。また、空港では、平成六年に関西国際空港と但馬飛行場が開港した。観光客総入込数を利用交通機関別にみると、道路網の発達と県内における家用自動車保有台数の急増（昭和五十五年度…約二万台から平成五年度…約三万台に二〇倍以上の増加）により、家用自動車利用が、阪神、播磨、丹波で大幅に増加し、全県で、五十五年度の一九四万人が、五年度に約四九二万人と、二・五倍を超えた。

また、ホテル、旅館の動向をみると、ホテルは、バブル経済の到来と自家用自動車の普及により全国各地で建設ブームが起き、県内も昭和五十五年の四三施設、四二二二室が、平成六年には二八八施設、一万七四一一室と、施設数は六・七倍、室数は四・一倍と急増した。旅館は、昭和五十五年の二九一五施設、三万一四〇八室が平成六年には二二九六施設、二万七〇四六室と、大きく減少している。利用施設別宿泊者数を見ると、ホテル・旅館の利用者は、阪神、播磨で大幅に増加し、全県では、昭和五十五年度の八〇二万人が、平成五年度に約一二二万人と、一・五倍を超えた。

二 体系的な観光振興行政の展開

兵庫観光の「のぞましい広がり」 観光は生活文化、地域開発、産業振興など関連分野が多岐にわたり、県民ニーズも大きく変化してきたことから、必ずしも体系的に観光行政が推進されてきたとはいえなかつた。

高度成長期は観光の大衆化の進展に応じた観光地開発、安定成長期は県民一人ひとりの余暇活動の支援、さらに、産業振興の視点から観光事業者の育成、観光客の誘致など観光振興施策が実施された。そして、観光振興の新たなマスター・プランとして、昭和五十七年度に、兵庫観光の「のぞましい広がり」をテーマとした「兵庫県観光振興ビジョン」が策定された。

このビジョンでは、まず一九八〇年代の観光の意義は、①個人の観光に対する積極的・創造的な意義づけ、②地域経済の発展など地域活性化への貢献、③地域の魅力を生かしたまちづくりの三点にあることを明らかにした。そして具体的には、①県民の観光活動の促進などの新しい観光像への接近、②民間エネルギーの秩

序ある誘導など観光産業の振興、③観光情報の提供など総合的情報体系の整備、④地域の特性を生かした観光圏の整備、⑤ビジョン推進体制の整備の五本の柱を基本方向に施策を展開することとした。

また、自然的条件や歴史的背景、地域の観光推進体制の整備状況、県の行政区分（六県民局体制）を見極めて、阪神、東播磨、西播磨、但馬^{たしま}、丹波、淡路の六地域に区分して、「地域別観光振興ビジョン」を策定した。

「うるおいとやさしさ」に 県は、観光振興ビジョンの最終年度の平成三年度に、引き続き、観光振興の基
 満ちた県民本位の観光振興 本計画を示す必要があるとして、「兵庫県観光振興基本計画」を策定した。

観光振興基本計画は、次の三つの点を基本的視点とした。すなわち、①県民主体の観光振興、②兵庫観光を取り巻く環境の変化や社会潮流への的確な対応、③新たな観光関連産業の創出・育成である。このうち県民主体の観光とは、単に県外から人を呼び込むためだけではなく県民福祉の向上にも資する県民本位の観光振興を目指し、物の豊かさだけでなく心の豊かさも追求する生活重視型社会を創造していく視点を備えるものとした。そして、基本理念は、「うるおいとやさしさ」を創造し、実感でき、発信する「観光振興を通じた魅力ある地域づくり」とした。

その上で、①人間味あふれた観光振興、②地域らしさの確立と観光情報の積極的な発信、③国際化への対応、④観光関連産業の振興、⑤新たな観光ネットワークの構築の五つの基本方向を設定し、基本施策を実施することとした。

昭和五十七年度の観光振興ビジョンの策定及び平成三年度の観光振興基本計画により、体系的な観光振興

第四章 社会の変容とこころ豊かな県民生活の創造

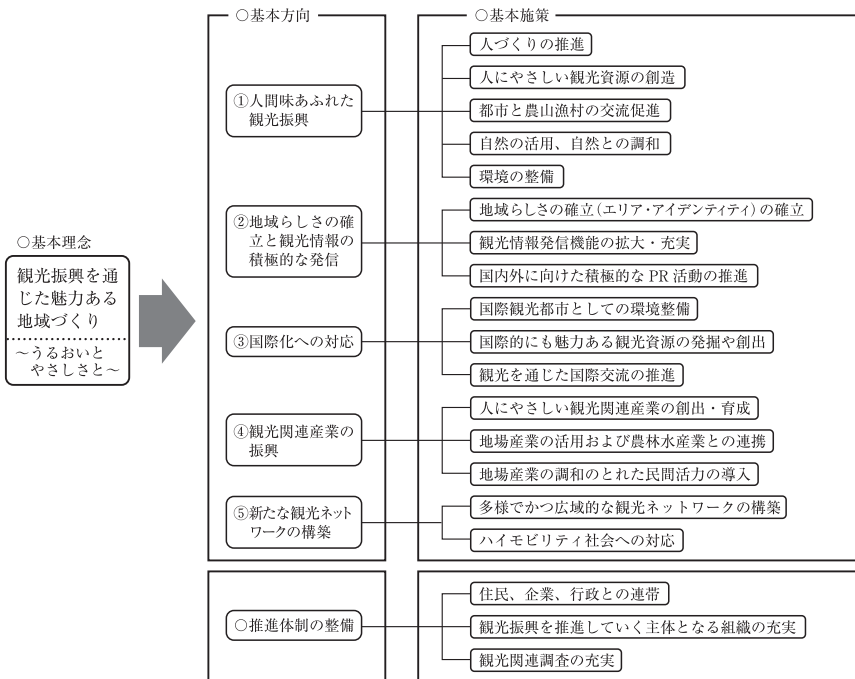


図91 兵庫県観光振興基本計画の基本構造

(『兵庫県観光振興基本計画』を参照して作成)

行政が展開されたが、この時期の県内観光振興の特色ある事業として、ハード面では、海洋レクリエーション基地として、淡路島の代表的な景勝地である慶野松原の海水浴場の整備や但馬の中心的な景勝地である香住海岸に今子浦ファミリパークが整備された。また、昭和四十四年度に完成した山陽自然歩道(二六〇キロメートル、川西市と上月町、九市四町)の利用促進のほかに、緑の回廊構想の一環として緑の回廊線(七七・五キロメートル)が整備された。あわせて、県立の都市公園として、昭和五十七年に西猪名公園(伊丹市、六・〇ヘクタール)、六十年に淡路島公園(淡路町(現淡路市)、一三四・八ヘクタール)、六十二年に赤穂海浜公園(赤穂市、七一・七ヘクタール)、また、森林公園として、平成五年に三木山森林公



写真 154 赤穂海浜公園



写真 155 ひょうごふるさと館

園（三木市、八〇ヘクタール）など、開設が相次いだ。平成四年度から、特産品の振興を図るため、展示、即売等を行うとともに、イベントや地域情報を通じた都市と農村の交流事業等の拠点とした「ひょうごふるさと館」（神戸市中央区）の運営を開始した。

ソフト面では、兵庫見聞ツアーや瀬戸内海観光協議会、観光立県推進事業が挙げられる。兵庫見聞ツアーは、昭和五十七年度から始まったが、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなど報道機関の記者等を県内の観光地に案内して、実地に紹介することにより各種の広報媒体を通じて効果的なPRを行うために実施された。また、瀬戸内海観光協議会は、昭和六十一年度に、瀬戸内観光の一体的な振興を図るため、圏内の一三府県五市を構成メンバーとして設立された。瀬戸内海周遊クルージングイベントや観光写真コンクール、瀬戸内海圏域広域観光ルートの設定などが行われた。なお、観光立県推進事業は、平成五年度に、運輸省が提唱した「観光立県推進会議」を京都府と共同で開催し、北近畿地域における今後の観光振興方策を確立するとともに、「ウィークエンドふるさと北近畿」をキャッチフレーズに全国に向けたキャンペーンを実施した。

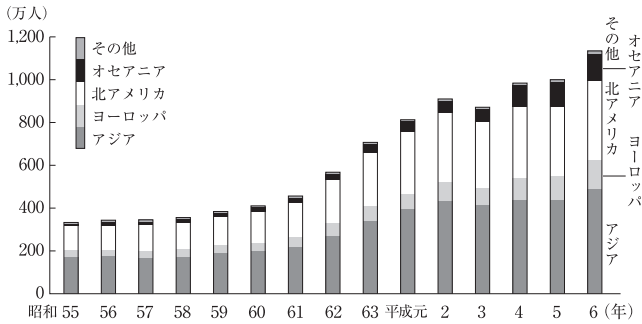


図92 日本人海外観光旅行者数の推移
 (「出入国管理統計」より作成)

三 国際観光の動向

急増が続く日本人
海外観光旅行者

日本人の海外旅行者は、昭和三十九年に海外渡航が自由化されて以来、手軽に利用できるパッケージ・ツアーの普及による大衆化、所得水準の向上、航空機の高速度・大型化

の進展、自由時間の増大、円高による海外旅行の割安感などにより、飛躍的な伸びを示している。国におい

ても、昭和六十二年に、海外旅行者数をおおむね五年間で一〇〇〇万人に倍増することを目標とした海外旅行倍増計画(テン・ミリオン計画)、平成三年には、双方向の観光交流の一層の拡大、海外旅行の質的向上を図ることを目的とした観光交流拡大計画(Two WAY Tourism 21)を策定し、その振興を図った。

日本人の海外観光旅行者は、出入国管理統計によると、昭和五十五年の三六七万人が、平成六年には一一二九万人と三倍程度にまで増加した。兵庫県の海外観光旅行者も、昭和五十五年の一五・二万人が、平成六年には五一・四万人と、全国と同様の水準で増加した。

地域別に日本人海外旅行者をみると、昭和五十五年は韓国、香港、中国、台湾などのアジアが一七二万人と全体の半数程度(五二%)を占めていた。しかし、オーストラリア、ニュージーランドなどのオセアニアは、昭和五十五年の六・五万人(二%)が、平成六年は一一八万人(二〇%)と大幅に

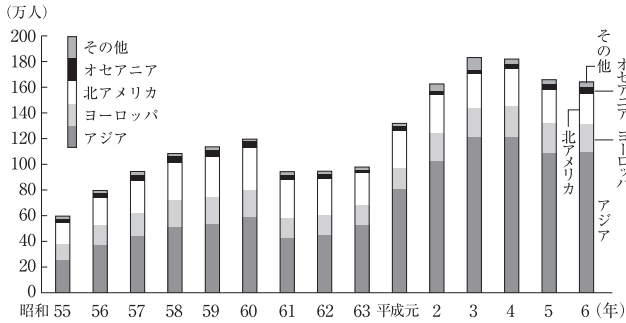


図 93 訪日外国人観光客数の推移
 (「出入国管理統計」より作成)

増加し、アジアのウエイトが若干減少する(平成六年、四四%)など、日本人の海外観光旅行先も多様化が進みつつあった。兵庫県の地域別の渡航先も、昭和五十五年は総渡航者(二八・九万人)のうち、アジアが一〇万人と半数程度(五二%)を占めていたが、平成六年にはオセアニアが五・六万人(九%)と増加する中、アジアのウエイトが若干減少(平成六年、四七%)し、全国と同様の傾向となっている。

訪日外国人観光客の増加

訪日外国人観光客は、昭和五十五年の五九・八万人が、六十年から六十三年までは六十年の実績を下回ったものの、その後増加傾向をたどり、平成六年には二八五万人と四・八倍に増加した。しかし、急増する日本人海外観光旅行者との差は広がり続けた。訪日外国人観光客を地域別にみると、昭和五十五年は訪日外国人観光客(五九・八万人)のうち、アジアが二五・九万人で全体の約四三%を占めていた。平成六年は訪日外国人観光客(二八五万人)のうち、アジアが一七六万人(約六二%)と、アジアの占める割合が増加した。なお、日本人の海外旅行先として大幅に増加したオセアニアからの訪日外国人観光客は、昭和五十五年の一・四万人(約二%)が平成六年は五・五万人(約二%)とそのウエイトに変化をみることはできない。

我が国を訪れる外国人旅行者数は、諸外国が受け入れる日本人海外旅行

者数に比べ極めて少ない状況にあったことから、国は、海外に対する宣伝活動を充実させ、外国人旅行者の我が国への誘致に努めるとともに、十分に我が国を理解できるよう受入体制の整備を図る必要があるとした。そして、その一環で、国際観光モデル地区構想が進められた。外国人旅行者受入体制の整備に熱心な地域を国際観光モデル地区として指定して、その整備を推進するというものである。昭和六十年には、三八道府県四三地区の指定申請の中から一五の国際観光モデル地区が指定され、兵庫県では、「神戸・姫路・宝塚」が指定を受けた。善意通訳研修会の開催や外国人観光客インフォメーションコーナーの設置、国際観光講座の開催などが進められた。

また、兵庫県における観光の国際化対策としては、昭和六十年から、近畿府県のイメージアップを図り、外国人観光客を誘客するため、シンガポールやニュージーランドなど世界各地で、近畿府県海外観光展を開催した。平成五年度には、兵庫県・ワシントン州姉妹提携三〇周年を記念して、観光を通じた国際交流を推進するため、米国ワシントン州において「シアトル兵庫フェア」を開催し、本県の観光魅力の紹介等を行った。